四月。幼稚園に入園する直前の子どもはいう。「幼稚園には、お友だちがたくさんいるんでしょ。あたしだけのお友だちがいるんでしょ」兄や姉がいる子どもは、兄や姉のところに遊びにくる子どもと一しょに遊ぶことができても、それは自分の友だちではない。幼稚園にゆけば、自分の友だちと遊べると思う。そして、毎日、何人もの子どもが手をつないでいる画をかいて、幼稚園にゆく日を待っている。この子どもが、入園する前日に言う。「うれしいなー、うれしいなー、あしたは幼稚園にいくんだ、お友だちが、五十人も百人もいるんだ」

入園式。小さな字の名前のはんこの押してある靴箱は、どれが自分のか、分らない。「靴をしまってお部屋にいらっしゃい」と先生に言われても、親も、自分の子どもの靴箱をさがすので、大混雑で、制止したり、大声を出したり、大さわぎになる。ようやく入園式になって、並んで、坐って、えらい人のはなしを静かにきいて、それでおしまいである。友だちと手をつなぐゆとりもない。子どもはへとへとになって帰ってきた。家に帰ってから、ほとんど口もきかない。

二日目。幼稚園の玄関から中にすぐには入らない。足どりもためらいがちで、部屋の入口にしばらく立って見ている。一時間半ほどで、帰りの時間であるが、玄関に出てきたとき、「もう、夕方？」とたずねる。よほど長い時間に感じたのだろう。

ここに記した子どもの例は、特別な事例ではないだろう。幼稚園にゆく前の子どもは、大きな抱負をもって、入園を待っている。ところが、一日目に、たのし

## 日本保育学会第29回大会お知らせ

**期　日**　昭和51年5月15日(土)・16日(日)
**会　場**　お茶の水女子大学
**内　容**　○幼稚園創設100年記念特別プログラム
　テーマ「日本の保育ーその理論と展開ー」
　○研究発表
**連絡先**　お茶の水女子大学児童学科、保育学会第29回大会準備委員会
　電話　03－943－3151　内線619・616
なお事務上の連絡は日本学会事務センター、日本保育学会大会係へ
　電話　03－815－1903

い生活をすることができる場合は稀である。これは、幼稚園にきて、子どもは、たのしみにしていた期待を裏切られるというようなことではない。もしそれだけのことならば、期待をもちすぎないように、あらかじめ話しておくこともできるだろう。ただ単に、期待が破られるというだけのことではなく、幼稚園が、子どもが精一杯、生活することのできる場所となりうるかどうかということなのである。自分の力を揮って生活しようとする幼児の、あふれるばかりの生命力を、幼稚園は、一目目からうけとめることができないものだろうか。

一日目に入園式ということは、ほとんど疑う余地もないことのように考えられている。けれども、はじめて子どもが幼稚園にきたとき、いつもと同じように、先生と目をかわし、ことばをかわし、面白く思ったものに手をふれ、ゆっくりと遊びはじめるようにできたなら、一日目から、子どもは遊びはじめることは、確実である。子ども同志で、そっと手をつないだり、目を見合わせるゆとりもあるだろう。これが幼い子どもにふさわしい一日目である。

次に、先生が一日目にすることがたくさんありすぎて、いそがしくしすぎるようでは、子どもにもゆとりがなくなる。ただでも一日には緊張がある。まして、はじめての子どもを並ばせたり、静粛にさせねばならないようでは、先生の気持ちに無理が生じる。あとになってからでもできることは、できるだけ第一日には省いて、ひとりひとりの子どもと目をかわし、手をふれ、親しくなれるように、ゆっくりと動く生活であってほしい。

（津守　真）

幼児の教育　第七十五巻第四号
四月号　© 定価二〇〇円
昭和五十一年三月二十五日印刷
昭和五十一年四月一日発行
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。